

## 時空を飛ぶ(2)

ベランダ雑感(記) H・I M A G I N E

見事な夕焼けなので、ベランダに立った。

あかね空・・・多摩丘陵の西空の向こうに我がふる里が在り、母校がある。ぼんやり眺めていると、よぎるのはあの歌。何故か舟木一夫さんの「学園広場」。

### 学園広場

あの歌が、ふっと湧き上がる時があつて、何故か無性に胸が一杯になつたりする。ついでにスマホで聴いたりして懐かしい気分になる。

ところが、僕にとって小田高時代がほの甘い「学園」であつた筈は微塵も無く、椋林の怖い先輩のオツスと教科書と黒板と運動場と、たまの学園祭と競輪場の鐘・・・舟木さんが歌う情緒などとは掛け離れた、受験勉強に没頭の振りしたような日々であり、いくつか貴重な支えになつた思い出はあつても、少なくとも「学園広場」では無かつた。

では、何ゆえ胸が一杯になつたりするのか。

どうやら、高校時代の理想像だつたのか、その時代が我が青春の「学園広場」のイメージにすり替わつてしまっているのかも知れない。別の見方からすると、映画やテレビドラマの格好いい主人公になり切ってしまう、アレである。

今では、あの歌は心のふる里のようなもの。

そういえば、心のふる里の歌は、も一つある。

あゝ上野駅！

これも、思わず涙ぐみそうになる思い出の歌である。

上野駅は、大学時代に中継駅としても利用し、また開業したばかりの国立西洋美術館（ル・コルビュジエ設計）や国立科学博物館などを訪ねる機会も多く、駅周辺もたまたまなく懐かしいところだ。

大学の工学部が、常磐線の松戸駅にあったので、上野駅はまさにホームのような存在だった。

その上野駅。

高い天井に明り窓のある駅舎の改札口から入構すると、さすがターミナルで多くの発着ホームがある。中でも忘れられないのが東北本線であった。

東北本線が終着のホームにぴたつと止まってドアが開くと、ピッカピカの中卒生や高卒生だろう、どつとホームに降り立つ。皆、まぶしく輝き弾んでいるように見えた。ふる里では辛い別れがあったと思うが、列車の中では希望の夢に切り替えて、上野駅では胸が高鳴っていただろう。やがて「金の卵」と云われるようになった。

僕は、集団就職のその姿を数年の間、何度となく見てきたが、どうやら、昭和二十九年からほぼ十年間続いたという。

そして、その想いが遂に歌になった。昭和三十九年、「あゝ上野駅」、井沢八郎さんが歌った。

♪どこかに故郷の香りをのせて、入る列車の懐かしさ、上野は私たちの心の駅だ、くじけちゃならない人生が、あの日ここから始まった……

初心は、心ふる里（続く）